トマス・アクィナスの知性論

水田英実著

創文社

水田英実（みずた・ひでみ）
昭和21年（1946）神奈川県に生まれる．
昭和44年（1969）京都大学文学部卒業．同大学院文学研究科，学術振興会奨励研究員，福井大学教育学部助教授，広島大学文学部助教授を経て，現在，同教授．西洋哲学を担当．この間，平成7年（1995）学位取得，博士（文学）．平成8年（1996）ローマ・グレゴリアナ大学客員研究員（文部省在外研究員）．訳書にトマス・アクィナス『知性の単一性について―アヴェロエス主義者たちに対する論駁』（平凡社，中世思想原典集成14所収）がある．

A Study of Thomas Aquinas' Theory
of
the Human Intellect

by Hidemi Mizuta

〔トマス・アクィナスの知性論〕

一九九八年二月二五日　第一刷印刷
一九九八年三月二八日　第一刷発行

著者　水田英実
発行者　久保井浩俊
印刷者　岡本健紀

発行所　株式会社　創文社
〒一〇三―〇〇二三
東京都千代田区麹町二―六―七
電話　〇三―三二六三―七一〇一
振替　〇〇一二〇―〇―九二四七二

著者との申し合せにより検印省略

クイックス印刷・徳住製本

ISBN4-423-30103-2　Printed in Japan

目　次

序……三
第一章　真理認識に対する欲求と節度――“naturaliter scire desiderant”（Ar., *Metaph.*）の解釈……一
一　問題の所在……一
二　神に関する真理の認識……一三
三　神認識に伴う困難……一九
四　知ることと知ろうとすること……二五
第二章　『エチカ注解』におけるアヴェロエス説批判……三一
一　問題の所在……三一
二　離在的な知性との接続による認識……三三
三　可能知性離在説の混入……三五
四　可能知性離在説に対する批判……三九
五　可能知性離在説の排除……四一
六　能動知性離在説の容認……四五
七　可能知性離在説を排除した知性論にもとづくアヴェロエス説批判……四八

第三章　『デ・アニマ注解』における可能知性の問題……五三
一　問題の所在……五三
二　論点一、可能知性はこの人間の形相でなければならない……五四
三　論点二、可能知性はこの人間の形相でありうる……六〇
第四章　可能知性単一説に対する論駁……六八
一　問題の所在……六八
二　語の意味、可能知性単一説の起源……七一
三　二重真理説の排除……七四
四　人間知性に関する問題の錯綜……七七
五　能動知性の問題と可能知性の問題の区別……七九
六　能動知性単一説に伴う議論の混乱……八三
七　能動知性に関するトマス説……八七
八　テミスティウスの知性論……九一
九　可能知性に関するトマス説……九四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第五章　『存在しているものと本質』序文における《エッセ》の認識……九九
一　問題の所在……九九
二　マウラーの解釈、カエタヌスによる『注解』……一〇一
三　ボビックの解釈、コンラドによる『注解』……一〇三
四　完成の秩序と起源の秩序……一〇八
五　最初に認識されるエンス……一一一
六　『存在しているものと本質』におけるアヴェロエス説批判……一一三

第六章　本質の二義性と知性の《エッセ》……一二五
一　問題の所在……一二五
二　部分的本質と全体的本質……一二七
三　全体的形相と質料……一二八
四　自然学的定義と数学的定義……一三一
五　質料の諸義……一三四
六　部分的本質と個的質料……一三七
七　全体的本質を考察する観点……一三〇

第七章　認識者としての魂の《エッセ》……一三四
一　問題の所在……一三四
二　『存在しているものと本質』第二章における「魂」の用例……一三五
三　『存在しているものと本質』第三章における「魂」の用例……一四〇
四　『存在しているものと本質』第四章および第五章における「魂」の用例……一四四
五　『存在しているものと本質』第六章における「魂」の用例……一五〇
第八章　魂の不死に関するトマス説とカエタヌス説……一五三
一　問題の所在……一五三
二　カエタヌスによる『デ・アニマ』解釈の変化……一五五
三　不死性の論証可能性に関するトマス説……一五七
四　死後の魂による認識に関するトマス説……一五九
五　魂の存在《エッセ》に関するトマス説……一六三
第九章　生命を与える魂—存在を与える形相——"Vivere viventibus est esse" (Ar., *De an.*) の解釈——……一六七
一　問題の所在……一六七
二　本来的な意味と非本来的な意味……一六八

三　形相因としての魂……一七三
四　実体的形相としての魂……一七六

第十章　第四の道と『存在しているものと本質』……一八〇
一　問題の所在……一八〇
二　存在判断と真理認識……一八一
三　本質認識を伴わない存在判断……一八七
四　存在しているものの類の拡大……一九一
五　本質認識を伴わない神認識……一九九

第十一章　第一に認識されるもの——*In Boet. De Trin.*, q. 1, a. 3 と *Sum. theol.*, I, q. 88, a. 3……二〇四
一　問題の所在……二〇四
二　第一真理としての神……二〇六
三　異論のアウグスティヌス解釈、トマスによる解釈……二一〇
四　第一に認識されるものとしての何性……二一五
五　第一に認識されるものとしてのエンス……二一九
六　認識における「クォ」quo と「クォド」quod……二二四

第十二章　トマスのイデア論――神の観念としてのイデア……二三九
一　問題の所在……二三九
二　語の意味……二三一
三　第一原因としての神……二三六
四　イデアの多数性と神的本質の一性……二三九
五　神の観念としてのイデア……二四二
第十三章　トマス哲学における能動知性の問題……二四六
一　問題の所在……二四六
二　能動知性の内在説……二四九
三　異なる働きをする異なる能力としての二つの知性……二五三
四　人間知性による神的知性の存在証明……二五七
五　能動知性の離在説……二六一
第十四章　トマスの知性論における存在認識……二六七
一　問題の所在……二六七
二　人間知性による最初の存在認識……二六九

三　トマス説とアヴィセンナ説……二八三
あとがき……二八七
註……20
文献表……10
索　引……3

トマス・アクィナスの知性論

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序

本書の意図するところは、トマス哲学における人間知性の問題に関する研究である。自存する完全な知性としての神的知性から人間知性を存在的に区別することは、キリスト教思想を新プラトン主義から峻別する、アウグスティヌス以来の既に確立された論点である。「神と魂を知りたい」[1]と願うことは、魂が神になることを求めることではなかったからである。トマスもまた二つの知性（神の知性と人間の知性）を区別し、万物の原因としての神的知性の存在証明を主題的に試みる一方、人間知性の問題をあくまでも魂の知性的な能力に関することがらとして論じている。[2]そこで従来のトマスにおける知性論の研究は、二つの知性（人間知性と神的知性）を存在的に区別することによりトマスをキリスト教思想家として特徴づけることではなく、もっぱら人間知性に特有の問題として、「抽象」から始まる認識の働きの過程を詳細に論じることに力点が置かれてきた。

しかしながらトマスの知性論を特徴づけているのは、知性による認識の働きに関する詳細な説明ではない。能動知性の内在を提唱するとともに、人間知性としての可能知性の非質料性を提唱している点にこそ注意を向けなければならないからである。じっさい、感覚的認識の対象としての質料的な諸事物から、光になぞらえられる能動知性の働きによって非質料的な可知的形象が抽象され、かつこの形象が可能知性によって受容されるところから人間知性に固有な認識が始まるというとき、そのことは能動知性のみならず可能知性の非質料性そのものもまた、さしあたりこのような仕方で成立するとされる認識の前提として措定されている。そのかぎりにおいてトマスの認識論に

おいても、この二つの知性（能動知性と可能知性）は他の事物と同様の仕方で認識されるわけではない。しかも人間知性が完全な知的存在として自存する神的知性と存在を異にしているとするならば、神的知性とは異なる仕方で存在する人間知性に固有の仕方でその存在を証明する必要があることは言うまでもない。

ところでトマスの知性論において、人間知性としての可能知性の非質料性が提唱されるとき、この知性ないし知性的能力が身体から離れて存在する非質料的実体であると主張されることはなかった。というより、可能知性の離在説の排除を伴うところにトマス説の特徴を見出すことができるのである。トマスによるアヴェロエス説批判の論点がここにあったことは言うまでもない。この論点がアリストテレスの『デ・アニマ』の解釈をめぐる両者の対立点であったことは、いわゆるラテン・アヴェロエス主義に対するマンドネやファン・シュテンベルゲンらの歴史的研究を通して既に明らかにされている。

『デ・アニマ』第三巻のヌース（知性）をめぐる古来の論議は、アリストテレス自身の記述の曖昧さに起因するものであるけれども、加えてトマスの時代には「アヴェロエスに端を発する」可能知性の問題として新たに「知性単一説」が提唱されるにいたった。この説に対してトマスが一貫して反対していることは、本書において詳細に論じる通りである。極端なアリストテレス主義と呼ばれるこのような思想傾向とそれに対するトマスの論駁について、これまでにも既に多くのことが明らかにされてきた。しかし「存在しているもの」の類の拡大というトマス形而上学に特有の問題がトマスの知性論に伴っていることについては、従来の歴史的な研究によって必ずしも充分に解明されたとは言えない。そこで本書において、トマス・アクィナスの知性論を研究するにあたり、成果の一つとしてこの点を明らかにすることにつとめた。

さて「存在しているもの」の類の拡大というトマス形而上学に特有の問題が、トマスの知性論に伴って新たな課

題として派生してくることを明らかにするために、われわれはまず本書第一章において、「すべての人間は生まれながらにして知ることを欲する」という『アリストテレス形而上学』の冒頭の一節に対して加えられたトマス・アクィナスの解釈を取り上げて論じることから始める。人間の本性的欲求が神を知ることを排除するものではないとみるところにトマス説の特質がある。それではこのようなトマス説を可能にする根拠は何か。このように問うとき、これに答えるトマス説の中に、「存在しているもの」の類の拡大という課題があることを見出すことができるからである。

ところで「人間が神を知る」ことを可能にする有力な根拠として、アリストテレスの知性論の中に見出されるのは、「神が神を知る」という神的知性の自己認識である。アレクサンドロスをはじめとする古来のアリストテレス解釈者たちが能動知性の問題として考察してきたのはこの点である。しかしながら神的知性と人間知性の間に存在的な相違が存するならば、人間が神を知ることと神が神を知ることとは別個の作用であると言わなければならない。そのために解釈者たちの間で、人間が何らかの仕方で神的存在と実体的に合一するという「接続説」が提唱されるにいたった。

この「接続説」に対するトマスの批判について、第二章では主としてトマスの『エチカ注解』を、第三章では主として『デ・アニマ注解』を、第四章では『命題集注解』から『知性の単一性』にいたる、その他の関連著作（『神学大全』ほか）を取り上げて論じる。これらのすべての著作を通して、人間存在が神的存在と実体的に合一するにいたるということをあくまでも否定するところに、トマス説の一貫性を見出すことができる。

『デ・アニマ』におけるアリストテレスの知性論に関して、トマスの解釈の仕方は（あえて中世後期の思想家と比較をすることが許されるならば）オッカムのそれとは異なる。[3] オッカムの認識論が古来の知性論に依拠することな

く、感覚的認識の中に確実性の充分な根拠を見出すものであったのに対して、人間知性に関するトマス説は、アリストテレス以来の能動知性の問題やその後の解釈の歴史の中で生じた可能知性の問題が錯綜する中で提唱されている。能動知性と可能知性という二つの知性に関する議論の錯綜の中で「この人間が知性認識をする」という命題が、人間知性の問題を神的知性の問題に還元することなしに論じられているのである（本書第三章）。「人間が人間を知る」こととしての人間知性の自己認識に関して、トマスが「神が人間を知る」ことに還元することなしに問題を提起することができたのは、人間知性自身による「知性の存在（エッセ）」の認識[4]に根拠をおいていたことによると考えることができる（第四章）。

本書第五章から第十二章にかけて、われわれはトマス哲学におけるエッセの認識の問題について詳しく論じる。アヴェロエス説を批判するトマスは、エッセの認識を根拠とすることによって『デ・アニマ』第三巻における二つのヌース（能動知性と可能知性）を共に人間知性に内在させえた。第五章ではトマスの『存在しているものと本質』序文におけるエッセの認識に関するマウラーとボビックの解釈の違いに着目してこの問題を考察する。第六章でも主として『存在しているものと本質』を取り上げ、トマスのいう「本質」が二義性を有するように思われるけれども、知性のエッセとどのように関連させるかという観点の相違から説明できることを明らかにする。さらに第七章において、『存在しているものと本質』の中でトマスが人間の「魂」を分離実体の一つに数えているところがあることを指摘した上で、それはアヴィセンナ説であって、トマス自身の説ではないことを明らかにする。第八章では、「分離した魂」anima separata をめぐるトマス説とカエタヌス説の相違を通して、魂のエッセに関するトマス説の考察を進める。第九章では『デ・アニマ』第二巻の中に見出される「生きているものにとって存在することが生きることにほかならない」という一節の解釈を通してトマスが示したエッセの意味について考察する。

第十章では、トマスによる五つの神存在論証の一つである第四の道と『存在しているものと本質』における存在理解に相違があることから、後者においてトマスは「存在しているもの」の類を拡大する余地がありながら、類の拡大を伴う仕方では神の存在論証を行っていない点を論じる。第十一章では、トマスは人間知性によって第一に認識されると言う一方で、識されるものは神ではないとする。トマスは、質料的事物の何性と呼ばれる本質が第一に認識されるもの」であれ、それが究極的な神認識にいたる道の発端でありうるのは、エッセの認識を伴うことによるということを論じる。トマスによれば、われわれが第一真理としての神を知るのは最後であって、最初にわれわれを知るのはむしろ神なのである。第十二章では、ここから展開されるトマスのイデア論について、補論として考察を加える。

続く第十三章において、われわれはトマス哲学における能動知性の問題を取り上げる。そこではアヴェロエス説に対する批判を通して示されたトマスによる可能知性の内在説が、能動知性の内在説を伴うものであり、その根拠がエッセの認識にあることを確かめるとともに、能動知性の離在説が信仰の教えとして言及されていることを指摘する。ジルソンによれば、この離在説は単なる「リップサービス」にすぎないという。[5] しかしトマスの知性論において、アリストテレス以来の問題の全体を継承するために信仰の教えが保持されなければならなかったとみることができる。トマスの知性論における存在認識は、あくまでも非質料的な二つの知性（可能知性と能動知性）がいずれも人間の魂の能力として内在するというトマス説に即したものであって、たとえ人間知性が最初に存在認識を得るということが「アヴィセンナが述べている通り」であるとしても、トマスが離在的な能動知性に関するアヴィセンナ説を容認しているわけではない。

第十四章ではこの点を検討するためにトマスのすべての著作からアヴィセンナの名前をあげて人間知性の最初の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com